



韻不多起



5  
1920





頤  
之  
記

百  
一  
百

乙  
亥  
年  
春

明利 5  
1920  
卷



龍溪

小危井記



許六選



雲泉のり水持多し終事終み人あやうし

高ふ人者多也下りて流泉出り事深淵なり

小危井と名づく別墅清日くもて小危屋河

流より日人姓と名づく許六よりく小危井

居ると許守小危と名づく別墅之驛原不知所

流より馬の竜山南よりく十旬春休





野々つゝのい半月は東風傾きしはく遠く  
さく東の空を流る湯江坂西の緑の如く  
海を渡る一葉の如く昔の如く風強の  
白くと岸の津の如くさくさく其の如く  
清く事一息山に泉脈流る一あき事  
くは開列の合泉の如く一と海は去  
流の白散る泉流の如くさくさく生  
泉の如くさくさくさく一と泉流の如く  
泉流流る如く其の如くさく霞山端の井邊  
湖原西上人名柳は徳今山の中流源也  
之流を要度大井一と神公の如く  
一と泉流の如くさくさくさく一と後  
山ありさく泉流流る如くさくさく一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と一と  
湖の如く  
日役



何處其苦比良之上其言恨く眼也

申 酒の二方其淋る是あり 聖法を子持法所

く 大と名右明くふくは杖と用事付

難と上り是く 金保徹く聲と半出の

雲々若彌江飲く 柳房々遊之牧と設

多而勝と下め宿ま二人一居其今く人

系流六徳と奉書はか物行く一月心

特と縁一駁路名治く 里は法法會

秋と吹く心屋く兼く河馬牛樹く牛鎮

と力に忘るは月く行く多月く細也

穿て下指は尺種と水の穴をみる節子所

植はくく 山城の為其居るは 嚙

滑石を文回く 僻曲く是二十余季子

膳せし臨介所 楊子采道く骨髄

何羅之ち古く裡の芭蕉及夫の梅月也

一味名風経と急じく世 年と根と







元禄十<sup>中</sup>年

十月二日許六亭具行

右

事<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>初<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>由

此<sup>ノ</sup>仕<sup>方</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>麦<sup>ト</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>許<sup>ニ</sup>云

油<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>愛<sup>シ</sup>小<sup>粒</sup>ノ<sup>味</sup>味<sup>ト</sup>酒<sup>堂</sup>

汁<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>愛<sup>シ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>粒<sup>ト</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>水

宿<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>申<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>水

え<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>故<sup>ノ</sup>包<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>筆

カ<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水

燒<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水

粉<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水

根<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水

水<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水

水<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水

水<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>傍<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>水







古の... 瓶... 堂  
 一... 原  
 深... 水  
 宗... 翁  
 榮... 云  
 花... 堂  
 七... 堂

四吟

鐘... 堂  
 葛... 云  
 酒... 村  
 京... 堂  
 月... 六  
 一... 由

牛由



春之く漢子持箱を糸に  
実

女房持箱の吏持の  
村

口口化能きく富の者  
由

向ふく持箱目持の無血  
云

糸之種よ糸のちを  
村

さんじい尻のりは小鹽  
実

引版の糸のきくは男歌屋  
云

海高風子浮持  
由

大酒を水端にやけ  
実

月夜に語は奥に世に  
村

一ちか中丸樹の花の  
云

池を田を麦を城  
由

水月社十之流  
村

魚く群多礼  
実

肥多女山武の草袋の  
由

と一多ふれは  
六







野波

秋子とて序の巻に

菊の目とて

序云

著月日

利牛

何れ

波

人執

云

七の

斗

藥礼

波

何れ

云

係年

牛

何れ

波

用

云

何れ

子

何れ

波

日

云

何れ

牛

何れ

波



ふん〜〜月おのほるる音 六

虫嫁かきか肌のみさるる 六

秋まゝのあゝお年感のあゝ 六

雪入の前は之井は推翁 六

一ふ〜はゆふ源〜徳の道 六

女子のまのやまがわやしのたろ 六

雄拂名道貞と云は終り 六

五平〜所〜名寄の 六

長流場は通つて奥の道 六

か〜〜〜〜倉のま〜 六

藤人娘の〜〜〜 六

此界宗の目〜〜〜 六

戸石禊は穂の目〜〜初は小の代 六

解の競いし床は長〜 六

根原越氷の〜〜〜 六

痺解〜〜〜〜 六







匠者匠心匠手匠器匠心匠手匠器

者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

匠者一系匠心匠手匠器匠心匠手匠器

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守

守



夫江流里母加所出

油

奈程の初り〜唐白の中

六

脚平の紐針と草外

草

程を以て着油之程驗の爲

油

解毒の礼と縁と道に

亦

潤滑油の爲に用ひて

草

少くも多くと如夷大里

油

油の香気と色と味と

六

徳和山多産の草に

草

花葉の油と香気と

六

香〜由名油に

油

三唯

没村

秋風草は〜その名の

河原柳の〜し〜

詳六



相撲の筋をいしと名をきく

牛車

きくし京のしんじくし海の水

村

かしのしんじくし伯文のしんじくし丸のしんじくし

云

能くしんじくし家のしんじくし

寺

いしんじくししんじくししんじくし

村

しんじくししんじくししんじくし

六

尾のしんじくししんじくししんじくし

村

しんじくししんじくししんじくし

村

美濃のしんじくししんじくししんじくし

六

あしんじくししんじくししんじくし

村

しんじくししんじくししんじくし

村

あしんじくししんじくししんじくし

六

灯籠のしんじくししんじくししんじくし

村

白川のしんじくししんじくししんじくし

村

むすしんじくししんじくししんじくし

六

あしんじくししんじくししんじくし

村



上中船目録に於て長原

河勢の如き浅き水行

浦の如き金の子知し

此の如き如き城

あつゝ中橋の茶屋

むま子嬢おらう

こ波やう津の如き

是の如き色に於ける

又源の如き源

掃除の如き十茶の

似城此の如き

小僧の如き

合連の如き

師走の如き

水風呂の如き

云々の如き

云々の如き

村

云

道

村

道

道

村

六

道

村

六

道

村

六

道

村

村



中町の垢塵の末々集舞道  
法付の巻巻輾る赤凡速く六

三吟

毛紙

誰が世の官の言出若く牡丹

如く源貴水流久多

西行の志軍法と如く小松寺

秋中やうく流夏厨者月

菊の流今とある魚と極楽

種じ藤井乃女及百姓

云々々々後疫病小いし事

武士の年れいり付い如

あまの身河原の巻巻反地

よいふ小け付黄葉名山

今と如くつ巻八百屋の巻

道

六

毛紙

羊鬘

程已

許六

岳

沈

六

已

丸

岳

已







昂然の下して禪のこころ  
深くも法華の果てふ奉白集  
善妙のこころを冬と春とを  
一時の筏を下して山に依  
眺して由らば益と病と  
真意の上は目には  
与法杖の別と具とある  
よるにこそは端のこころ

六 岳 九 巳 巳 六 九 岳 六

二吟

高ん者よ膳指酒のこころ  
日向の照る影の陽を  
奉公の生れり前めたる位  
申してはるる系は根の後

六 李由 許六



夕の終るるの時の由

後を悔くまを確する由

上中と送りしうひの魂系

死にしるの布と語り

あふりし涙の情ふまひて

讀丸とゆふ尾法角ひ

恨負那女房の影を化装と

烏帽子して祢直のお入る

去冬よ若草山の夏あ

元とつけて見るとの十女

知しるのしる持あはる

草相織るる江戸のさき

生うるま根のあははる

婿うりしはしゆえの管に

白い物虫を掃揚とひのま

年うはるるのしるまは

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由

由



上鉶の糸（？）のこころは山中

六

ついでに鉶（？）のおはなれ

由

母のこころを鷹の如く揚げる

六

とんちんかんのこころを奉る

由

祐子（？）のこころをひたれ

六

世を治むる世を治む

由

嵐のふたりのこころを

六

初めはあつた

由

水風名の中（？）のこころ

六

はなは波をなす

由

初めは油をなす

六

田をなす

由

ゆきをなす

六

こころをなす

由

寛のこころをなす

六

こころをなす

由



七師三田忌 報恩

許六

月高小洲

李

少者有母

李由

蒼麥切

本導

技及同士の

牙袖

懐の婦

汶邨

うし

馬佛

家

并密

松

胡布

敷

毛紙

去日

程已

人島

徐寅

介

六

手

由

根

道



於此田村中孝子所産するに  
 以て其母ありて其母の月  
 息美そそ見ると人々  
 一室もあつて長年し  
 中を清くする佛の沖洗濯  
 庭中もあつて中も女は  
 佩板の如くして清くし  
 味もあつて其母の如く  
 加へて其母の積る古き  
 さらぬ其母の及ぶを  
 以て其母の合意見ると  
 其母の如くして其母の如  
 其母の帯女は其母の及  
 其母の所乃山名も其  
 其母の如くして其母の如  
 其母の如くして其母の如

布 岳 佛 村 油 道 由 六 宮 巳 汎 布 岳 佛 村 袖







鳥の羽を肥く  
言はくはし 風流の片腕にたゞされたる月あか  
花はけく一人と名りて 千悔集梅の悲涙示る  
冥府おれとて 去後まはし 解しと 新筆の  
ちきりてを謝らぬ

字也

干練とてそれ子法の駭れ際

時句あはれん女馬鳥

首座の味あまらぬ 如藤森

泊瀬名河の月のかさ

まはるるゆけとわさ一習

うん橋のよみ秋の祝

湖とや 具度大紫色

一西大志の二うしつ

鼻をきくもとれ能の節

美のたぐうて 武の隈

叔系の証志はりの書

涉正  
許云  
手他

手等

程已

汶村

徳良

毛汎

茶密

概筆































其集之その巻へおるそのはひてよとれを  
亡師は猿身の一烈は是は略は

天竺の猿の賦 再上席

猿の風情のもたれはく之を魂あり  
宗法の見残しは流落の情と我を  
首川の田徳平河守初め栗村のり  
うらなひのなまきり多し河守あり  
流し山を夕涼といふ浦と縁の依渡橋を

天竺の女河林を流と名はまよりの猿の  
二鳥は流れて七なる宗法とてりり方  
上 猿の口鼻と感し一河の情を  
流るる日武ひらき河守とてて画  
新讀み及好ゆ 市 女猿十河の流を  
流しとて何れも来ぬ其風情は  
しるも宗法とて何れもね賦之版  
栗田乃草花の流はりて臨唐唐











舟川のところがさういふ意の情なり〜  
舟のたぐひもかき集めの子歌も書入るお  
のう草は戸を流りぬく首をひたし  
法はふ〜とあり〜息はは〜  
鴻田を各々賊〜は法還る何れ  
〜とあり〜をた〜るをた酒は天龍  
〜名中のぬ〜る人長江をた〜  
人々股〜をた〜  
〜者〜負れ〜度〜  
ト 旦那が法〜  
〜手〜加る〜  
酒の酒も法〜  
漂〜  
〜とあり〜  
〜とあり〜  
〜とあり〜  
〜とあり〜



走下りて吸うとくは此毒を吐きたるは  
二年の世に成り今も之を平しむる  
一と雖も此毒は多く世に成り人  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
世を也くくくくくくくくくくくく

出女を成出うくくくくくくくく

流浪漂泊のくくくくくくくくくく

あつれ他何王くくくくくくくく

おくと先ん方りも此細雲其のくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

おふくくくくくくくくくくくく

極め此れ傷くくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく







のこり一書名はかたし風流の書名  
といひし書名はかたし風流の書名

五老井主人

武井 奕羽官 許子六

孟耶觀主頭

景澤衛人 買年僧 亦子由





出物

取聖

の一事一音及妙之風雅也  
若月  
若月  
若月  
若月

丁酉元録九年



丙子冬楳有目於

風狂堂選之





